

## 外国語部会

＜県研究主題＞

コミュニケーション能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 有田 綾子（中地区）

＜研究主題＞ 活動のねらいを明確にした授業の工夫

～教科書本文の扱いと英作文指導について～

### 1 提案内容

日々の授業実践の中で、「書くこと」については、語彙数の不足や英語の語順の理解不足などから、表現したいことがあるにもかかわらず、うまく表現できず、特に「書くこと」が苦手と感じる生徒たちが多い。また、授業内での個別の対応に限界があり、添削に時間がかかるなど、指導するうえでの問題点を感じる教員も少なくない。

以上のことから、4技能の中で「書くこと」（英作文指導）について研究する必要性を感じ、教科書の扱いと英作文指導について特に研究を進めることとなった。

#### （1）実践の概要

##### ① 研究テーマに迫るための手だて（提案資料 1～2 ページ）

###### ア 日々の実践と教科部会

市内中学校において、情報交換や研究協議を行った。

###### イ 平塚市教育委員会による計画訪問

計画訪問における公開授業では、既習事項を活用した英作文のための効果的な活動とそのねらいについて研究協議を行った。

###### ウ 中教研英語科研究部主任会

年 3 回各校の実践を持ち寄り、研究協議を行った。

###### エ 中学校英語教員研修会

市内全英語科教員を対象に研修会を行った。

##### ② 研究実践（提案資料 2～6 ページ）

###### ア レッスンごとのワークシート作成

教科書内容を確実に理解することは、英語を学習するうえで有効であると考えられる。そこで、レッスンごとにワークシートを作成し、自己表現をするときにモデルとしてふさわしい表現を身につけられるよう工夫した。

###### イ パターンプラクティスから自己表現へ

教科書中の活動を利用し、さらに自己表現のためのプラスワンの活動を設定することで、生徒は目標を持って活動を行うことができる。

###### ウ 教科書本文から自己表現へ

教科書本文をモデルとして、必要なところを置き換えることで、まとまりのある英文を書く練習をすることができる。まとまりのある英文の書き方を身につける活動としても有効である。

###### エ テーマを与えて英作文

テーマと具体的な状況設定を与える（たとえば、手紙に対する返事など、相手意識をもたせる）ことで、生徒たちにとって何を書くべきかが明確になった。そのた

め課題に対して生徒たちは意欲的に取り組むことができた。

#### オ 相互評価を行い他者の視点を入れる

他者が書いた英文の内容をグループなどで読み取り、分かった内容を伝え、作品を相互に添削することで自分の「書くこと」に対する力を把握することができる。さらに、作品を推敲することで、他人の表現を学び、それを取り入れることもできる。また、出来上がった作品は掲示することで、グループ以外の作品から学ぶことができ、学級のメンバーが互いを理解することにもつながり、安心して自分のことを表現する雰囲気づくりにも役立つと考えられる。

#### (2) 成果と課題（提案資料7ページ）

- ① 「もっと書きたい」「これはどのように表現したらよいのか」と、書くことに対して意欲的に取り組むようになってきた。
- ② 教科書本文を利用することにより、伝えたいことをスパイラル的に増やしていくことができる。教科書で学ぶことにより、生徒たちの「書きたい」気持ちを育てていけると考える。
- ③ 目指す生徒像を再確認し、そこに向けてさらに計画的に「書くこと」に取り組んでいくことがこれからの課題である。

#### 2 協議内容（参加者と提案者との質疑応答）

- (1) Q: 「書くこと」に焦点を絞ることによって、生徒の「話すこと」「聞くこと」の活動にどのような良い影響があったか。  
A: 「間違えてもいいから話そう」という気持ちが出てきた。  
テストでも、「やろう」という気持ちが出てきている。  
Q: 生徒にまとまった英文を書かせるために、内容的な広がりをもたせるか。また、評価はどのように考えるか。  
A: 定形のパターンを応用させると、ある程度の語数を使うことになる。  
評価は、1年生の段階では特に「書こう」という気持ち（関心・意欲）を育てることを大切にしている。2年生では、表現の正確さも見る。

#### 3 助言

- (1) 中学校教員として、小学校英語を経験して中学校に上がってくるときにどのような生徒たちとスタートしたいのか。何年か前と状況が大分変わってきているのではないか。ALTとの授業の持ち方にもまだまだ課題がある現状である。
- (2) 今回の発表には3つのキーワードがある。
  - ・【必然】小学校から英語を経験してくる生徒に、知的好奇心を与え、高める。その手立てとして、教科書をうまく使うことにより、一貫して指導する良い流れができる。
  - ・【相手意識】相手意識を持って取り組むことで、知的好奇心があおられる。自分のパーソナルなところも相手に伝えられる。また、他者理解につながり、新しい友達とのかかわりができる。
  - ・【履歴】小学校での外国語活動の「履歴」を知る。「どんな活動をしてきたのか」を知る大切さがある。

## ＜研究主題＞

～中学校 3 年生「修学旅行での体験を語ろう」～

## 1 提案内容

意欲的に授業に取り組み、英問英答にも積極的な 3 年生を担当している。彼らは合唱コンクールや文化祭でも優れた表現活動を行っている。一方、他者の話を集中して聞けない生徒も多い。外国語科としても、音読やスピーチにおいて表現力を伸ばすとともに、関心をもって相手の話を聞くことができる生徒を育てたいと考え、この主題を設定した。

## (1) 実践の概要

教科書の内容を受けてスピーチ発表を計画した。目標：①「相手意識をもったスピーチをできるようにする」 ②「質問者の意図を理解し、適切に答えられる力をつける」の 2 つを立てた。目標達成のために、ア.繰り返し練習 イ.写真や絵を効果的に使用 ウ.AET にその場所に行きたいと思わせる内容の原稿作成 エ.スピーチ発表後に AET による Q&A 実施を採り入れた。

## (2) 成果と課題

帯活動での練習を重ね、原稿を見ないで発表できた生徒が多くいた。一方、原稿の語句を正確に発音できない生徒もいたことから、個別の配慮が必要だと感じた。優れた発表をした生徒でも、AET による質問が Yes-No クエスチョンだった場合、「Yes」一語のみで返答している場面があった。日常的にプラスワンで答える等の指導が必要だと感じている。この気づき後、継続したやりとりをする力をつける目的でチャット活動を導入している。発表活動を通してより良い人間関係づくりを目指したい。

## 2 協議内容

## (1) 参加者と提案者との質疑応答

①Q: 練習を進めるときのペアはどのようにつくっているのか？

A: 教室の座席のまま、周囲とペアをつくるようにした。そこで、slow learners 同士のペアも存在していた。課題である。

②Q: スピーチ活動をする以外に 3 年間のゴール設定はあるのか？

A: スピーチ後、Q&A ができるように、というゴールは考えているが、織り込む文法や文量のゴール設定は未定。

③Q: スピーチ発表後の AET からの質問とその答え方について、生徒にはどのような指示を出したか？

A: 生徒には、「できるだけ豊かに答えるように」と伝えた。

④Q: 提案資料中の「"Strawberry Questions"を中心にしたチャット活動」とは？

A: Strawberry [イチゴ→15] Questions とは 15 の質問文例で、横浜市教育委員会発行「中学校外国語科事例集」に掲載されている。それを活用したチャット活動。

⑤Q: スピーチ原稿作成に当たり、辞書を使わせると、難しい語句が使われて聞き手にわかりにくくなるのでは？

A: 今回は修学旅行を話題にするため、歴史の説明を加えるには辞書が必要と判断し、使わせた。「聞き手が分かる表現を使うように」としたが、辞書を使った本人が、調べた表現を使い切れていない例もあった。

⑥Q: スピーチ評価の「説得力」という項目については、生徒にどのように説明したか？

A: 「AET に伝わるよう、楽しそうに発表する」「年号などの情報ははっきり伝える」「『〇〇像は◇◇先生より大きい』のような、印象づけられる表現を使うように」と指示した。また、AET から一人ひとりの良かった点・課題を評価用紙に一言ずつ

書いて返却した。上手だった生徒を AET に発表してもらった。

## (2) 協議内容

3~4 人のグループ別協議を行った。plus 1 or 2 sentences をする指示を出す、暗記したものから発展させて語句を置き換えた作文をさせる(モデル文を覚え、一部換えて作文する)、モデルスピーチを視聴したうえで発表につなげる、チャット活動後にレポートイング活動を入れるなど、様々な活動案が活発に提案された。

## 3 全体協議 (グループ協議とその発表)

- (1) 読む力をつけるのに、単元毎に長文読解を含む小テスト実施も良いのではないか。
- (2) Speaking 活動においては、技術面以前の課題として、その話題に関する思考の過程が大切。必然性を持たせた writing 活動をする上で、CEFR の CAN-DO リストが参考になるかもしれない。
- (3) 各学年のゴールを明確にするのが大切。また、英語科教員と生徒の中での共有も大切。
- (4) 4 技能の力を養っていくために、1 技能単独ではなく、複数の技能を活用する活動の設定が望ましい。
- (5) 年間計画・単元計画があっても、うまく活用されていない。
- (6) 自学帳の取り組みも有効。ペア学習は、leader / slow-learner でつくり、つまづきをそのままにせず、全員が取り組める授業づくりをしていく。

## 4 指導・助言

- (1) 指導計画の中でねらいを明確にしている(生徒にも教員にも、ねらいがきちんと見えている)のは、難しいが大変重要な視点である。
- (2) それぞれの中学校で3年間の学習を終えるときの目標を外国語科職員で明確に示しておくのが大切である。どの教員に習っても同様の力がつく学校標準が求められている。
- (3) 指導要領を読み込み、何を指導すべきかを把握するのも重要。それを踏まえて、生徒の活動は適切か、生徒はどんな力をつけているかを見極める力も教員には求められる。
- (4) 子ども同士の学び合いの視点を活かしていくと良い。学級経営や授業づくりの中で、学びの意識を学校全体で共有をしていくと、生徒たちのさらなる意欲に繋がる。
- (5) どのようにしたら生徒に力がつくか、熱心に研究した過程の伝わる提案発表であった。

## 5 まとめ

- ・小学校では「体験的に」「音声面を中心に」行うのが外国語活動であり、中学校では「4 技能のバランス」が学習のテーマである。その違いを再確認する必要がある。学習指導要領を再読し、中学校3年間でつけさせたい力は何かを再考してほしい。
- ・『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』(文部科学省より)などを参考にし、3年間のゴールについて考えてほしい。
- ・なぜ「CAN-DO リスト」なのか。「つきたい力」(~できる)が明確な単元目標の設定を心がける、そのような指導を重視する。言語材料の定着を単元の大きな目標であると想定しない。その「材料」を使って何かできることをめざす。また、単元の層を厚くするため、「+週1コマ」を年間で「+35コマ」としてとらえる。「年間で140時間を各単元に配分するという発想」で授業改善について考えてほしい。
- ・英語教員を対象とした特別受験制度(検定試験の割引)、その他、国が公表したDVD、ポータルサイト、資料等【評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料】【特定の課題に関する調査(英語:「書くこと」)調査結果】を活用してほしい。